



## 万博記念公園 “生物多様性の10年” 行動計画

- 万博記念公園は、1970年に開催された「日本万国博覧会」の会場跡地を、「緑に包まれた文化公園」という理念に基づき、整備が進められてきたものです。
- いったん切り開かれて、コンクリートやアスファルトで覆われた大規模な人工地盤の場所に、生物多様性の豊かな自然（自立した森）を再生するという試みは、世界的に見ても前例のない取り組みでした。
- それから30年が経過した2000年、植栽された樹木は公園を包み込むまでに大きく成長し、「緑に包まれた文化公園」を目指すという初期の目標はある程度達成されました。しかし、当初計画した緑の「量」としての森づくりは実現できましたが、多様な樹木を多数植栽したにもかかわらず、一部の樹木以外の樹高成長は緩慢であること、しかも高木層のみの単相林となり、中木層・低木層・草本層が消滅した状態であること、また、その結果、生物多様性に欠けることなど、その「質」においては様々な問題を抱えていることがわかりました。
- このまま対策を講じなければ、生物多様性の豊かな自然（自立した森）の実現は困難であると判断し、今後どの程度、どのような形で「人手」を加えていくことが適切であるのか、等の具体的な手法について、専門家による「自立した森再生研究委員会」を組織し、その指導・助言を受けながら、順応的管理を基本姿勢として取り組みを進めてきました。
- そして博覧会から40年以上が経過した現在、まだ緑の「質」の向上が図れたというレベルには至らないものの、里山生態系の頂点に君臨するとも言われる猛禽類「オオタカ」が5年続けて営巣するなど、生物多様性向上の“兆し”が見え始めてきたのではないかと考えています。
- 一方で、豊かな森林の形成の影で、キジやヒバリ、モズ、ホオジロといった草原の鳥が1990年の頃から顕著な減少傾向を示し、かつては万博記念公園に生息する野鳥の「顔」と言われたキジは、ここ10年以上にわたって姿を見ることができなくなりました。このことは、森林の成長にともなって地面に日が射さなくなった結果、草地環境が衰退し、そこが住処のキジをはじめとする生きものが減少していることを物語っているのでしょう。
- さて、2011年は、国連の定めた「国連生物多様性の10年」の初年であるとともに「国際森林年」でもあり、ここ「万博記念公園」においては、「都市における生物多様性の向上を考える」（2010年11月）及び「都市の中に再生された森林を活かす」（2011年10月）という各テーマで公開シンポジウムを開催したところです。
- 今、私ども万博記念機構は、「自立した森再生研究委員会」の提言に基づき、また、前記シンポジウムの成果を踏まえ、都市の中の生物多様性豊かな（緑の質の高い）森を目指す「新SATOYAMA宣言」を発表するとともに、その実現化方策として「万博記念公園“生物多様性の10年”行動計画」を策定しましたので、ここに公表します。

2012年3月22日  
(独) 日本万国博覧会記念機構



## 万博記念公園「新 SATOYAMA 宣言」



- ◇生物多様性条約の COP10 で採択された「SATOYAMA イニシアチブ」では、かつての里山の生産システムが、「人と自然との共生」を実現する鍵を握っていることが示されました。
- ◇しかし、利用価値を失った里山では、この資源循環を基調とする生産システムが崩壊しています。
- ◇再び里山を活性化させるためには、今、里山というものの自体をよく知ることが必要だと考えました。
- ◇そこで、里山を知り、学び、体験できるエリアとして、都市内という便利な立地で、しかも安全な「万博記念公園」の役割が浮かび上がってくることに気づいたのです。
- ◇「生きた自然を体感する環境学習の場」、「誰もが自然再生活動に参加できる場」、「バイオマス資源の循環利用の場」として、本当の里山の「前線基地」として、本公園を一層活用していくことを宣言します。

(2010年10月 COP10 生物多様性交流フェア)

## “生物多様性の 10 年” 行動計画

### 標語

- ◆「万博公園 新 SATOYAMA 宣言」の実践で“生物親和都市”の大拠点づくり！

### 期間

- ◆2012年3月から2022年3月までの10年間



### 位置づけ

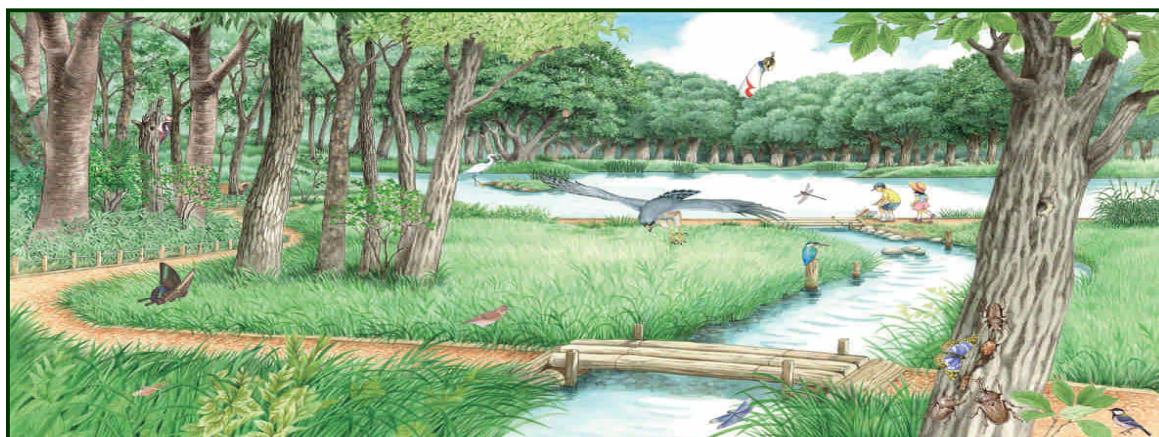
- ◆「自立した森づくり計画」の枠内における、この10年間の“行動計画 (action plan)”

### 目標

- ◆次の3つのトピックを主軸に、都市の中の“生物多様性豊かな森”の実現を目指す
  - (1) 自然のエントランス機能の充実（都会に住む子どもたちが最初に接する自然環境、都会に暮らす人々の健康づくりの場）
  - (2) 緑（自然環境）の質の向上（モザイク的な環境配置とネットワーク化、エコトーンの充実）
  - (3) 資源循環型モデルパークづくりの推進（多様な主体との協働）

### 将来像

2022年の万博記念公園



## 目標達成のための13項目の重点取組み

◆ 次の3つのトピックを主軸に、都市の中の“生物多様性豊かな森”の実現を目指す

### (1) 自然のエントランス機能の充実

■ 体験型自然環境学習や健康増進の場・機会の提供

① 自然観察学習館の機能強化に努めます

② 健康増進の場としての機能強化・利用普及に努めます

### (2) 緑（自然環境）の質の向上

■ 自然環境の保全・再生・創出・ネットワーク化

◆ 草地環境、湿地環境の創出によるモザイク的なビオトープ空間の配置

③ 草地（雑草地）や湿地環境の再生を進めます

◆ 林縁や池畔における“エコトーン”の創出及びその維持管理

④ 実験結果を踏まえ、大規模なエコトーンの創出を図ります

◆ エコロジカル・ネットワークの創出

⑤ 園内エコロジカル・ネットワークの充実を図ります

⑥ 園外との広域ネットワークの実現に協力します

■ 多様な動植物の生息・生育環境の保全・再生・創出

⑦ 本園の“レフュジア※”機能の強化を図ります

⑧ “コアゾーン”として立入禁止区域設定を検討します

⑨ “侵略的外来種”の個体数調整を図ります

⑩ 生息環境が整っていると判断される種の導入を検討します

※レフュジア：待避地

■ モニタリング調査の充実

⑪ 本園全域を対象とした「生きもの調査」を実施します

⑫ “指標生物”を使った自然の経年変化の把握に努めます

### (3) 資源循環型モデルパークづくりの推進

■ 生物多様性豊かな里山的環境の維持・創出に資する取組みの継続・促進

⑬ NPO団体との協働による資源循環の取り組みを進めます

### 13 項目の重点取り組みの詳細



#### (1) 自然のエントランス機能の充実

##### ■体験型自然環境学習や健康増進の場・機会の提供《生きものと触れ合いながら学び、リフレッシュ!》

###### ① 自然観察学習館の機能強化に努めます

- ◇校・園外学習の場の提供
- ◇より効果的な学習プログラムの開発・提供
- ◇指導スタッフの充実（ソラードの会・指導リーダーの会）
- ◇自然体験型イベントの開催（草木染め、どんぐりクッキー・リース作り、etc）
- ◇園内情報の効果的な発信（HP、学習館情報ボード）
- ◇生態展示の充実（学習館展示コーナーの活用）



###### ② 健康増進の場としての機能強化・利用普及に努めます

- ◇中・高年者等の森林浴、森林療法などの実践の場としてふさわしい空間の形成

#### (2) 緑（自然環境）の質の向上

##### ■自然環境の保全・再生・創出・ネットワーク化

###### ◆草地（雑草地）環境、湿地環境の創出による“モザイク”的なビオトープ空間の配置

###### ③ 樹林の生長に伴い減少傾向にある草地（雑草地）や湿地環境の再生を進めます

- ◇草地環境の再生
  - ・森林内にギャップ空間を創出
  - ・現行の芝生地の一部を雑草地に転換
- ◇湿地環境の創出
  - ・既設水路からギャップ内、草地内の一部へ水を誘導



###### ◆林縁や池畔における“エコトーン”の創出及びその維持管理

###### ④ これまでの実験結果を踏まえて、大規模なエコトーンの創出を図ります

- ◇樹林—林縁—水辺—水面（湿地）のモデル展示

###### ◆エコロジカル・ネットワークの創出

###### ⑤ 園内エコロジカル・ネットワークの充実を図ります

- ◇樹林内に湿地等の水辺や草地を介在させ、それら各環境のネットワーク化を促進

###### ⑥ 園外との広域ネットワークの実現に協力します

- ◇北摂山系～本園～淀川をつなぐネットワークの拠点機能の発揮（種の供給源）

■多様な動植物の生息・生育環境の保全・再生・創出



**⑦ 本園の“レフュジア”（待避地）機能の強化を図ります**

◇希少種のみならず、普通種の生息・生育環境の維持・保全

- ・モニタリング調査の継続。調査結果を踏まえた生息・生育環境の適切な保全策の実施
- ・必要に応じて“立入禁止区域”の設定（現在、オオタカ営巣期間において採用）

**⑧ “コアゾーン”（サンクチュアリー）として立入禁止区域設定を検討します**

◇想定している場所

- ・水鳥の池及びその周辺林（特に設定した“利用可能日”以外は遊歩道を閉鎖）

**⑨ 在来種の生息・生育に悪影響を及ぼす“侵略的外来種”の個体数調整を図ります**

◇想定している対象生物

- ・ウシガエル ・アメリカザリガニ ・ミシシippアカミミガメ ・ジャンボタニシ
- ・アゾラ クリスタータ ・アライグマ ・ソウシチョウ

**⑩ 生息環境が整っていると判断される種の導入を検討します**（自力で到達の困難な種等）

◇想定している対象生物

- ・フクロウ、アオバスク（営巣用の模擬樹洞の設置）



■モニタリング調査の充実・情報発信

**⑪ 本園全域を対象とした「生きもの調査」を実施します**

◇「みどりの調査」（H8~10）以降10年以上経過 → 同等の調査を実施

**⑫ 来園者参加型の“指標生物”を使った自然の経年変化の把握に努めます**

◇「セミのぬけがら調査」や「タンポポ調査」等の継続実施（実施体制整備）



**（3）資源循環型モデルパークづくりの推進**

■生物多様性豊かな“里山”的環境の維持・創出に資する取組みの継続・促進

**⑬ NPO 団体との協働による資源循環の取り組みを進めます**

◇地域連携の拠点としての機能の向上

◇竹林・樹林の維持管理・バイオマス資源の循環利用

- ・間伐、製炭、間伐材の燃焼→足湯の供給、バイオマス発電の実験

◇水質浄化、環境保全型農業の実践



## 万博記念公園における“生態系”の変遷

- 約 40 年前に一度は破壊された自然、さらにアスファルトやコンクリートで覆われた人工地盤上からはほとんどの生きものが姿を消してしまった。
- そして 40 年が経過した現在、多様な生きものが生息・生育する自然環境が創出されたが、1990 年頃から森林の生長に伴い草地環境を好む種の減少が顕著になりつつある。
- 一方で、ギャップの造成など順応的管理の取り組みの成果か、里山生態系の頂点に君臨すると言われる「オオタカ」が繁殖するまでに生態系が豊かになりつつある。

